

ヨーロッパ人の調査活動と介在者の「食人」文化の創造

弘末雅士

一 はじめに — 問題の所在 —

一九世紀後半から二〇世紀始めにかけて、インドネシアの大部分の地域がオランダ植民地支配に置かれるにいたった。植民地支配を拡大していく第一段階としてオランダは、しばしば探検家や政庁官吏に支配対象となる地域への調査旅行を実施させた。彼らはその地域のオランダとの接近を望む有力者の協力のもとに調査を実施し、当該地域の地理・政治・経済・社会・文化等についてデータを収集した。後日オランダはそれらをもとに植民地支配を拡大していった。本稿は、こうしたヨーロッパ人が行った調査活動において、インフォーマントとなった現地社会とヨーロッパ人との間の介在者の役割に注目したい。彼らは来訪者に対し、しばしば地元の文化・社会を「異化」して提示することで、自らの仲介者としての役割の重要性を主張していると思わ

れるからである。一般に一九世紀・二〇世紀のインドネシア社会は、学術的にもオランダの東インド学の研究対象となり、その文化・社会がヨーロッパ人の認識枠組みのもとに再構築され「博物館」化されていくことが指摘されてきた。^[1]しかし、他方で東インド学の構築に、現地側のインフォーマントの果たす役割の重要性がしばしば言及され、必ずしもヨーロッパ人による一方的な知の植民地化としてはとらえられない問題を有しているように思われる。^[2]

こうした問題を考察する上で、東南アジア島嶼部における「食人」がインフォーマントによっていかにヨーロッパ人に提示されたかは、興味深いデータを提示してくれる。「食人」は、ヨーロッパ人旅行者や植民地支配者によって非ヨーロッパ的な「特異」な慣習として記述されてきた。これらの記述をめぐって、ヨーロッパ人の他集団に「野蛮」や「異質性」を見出そうとするバイアスが、しばしば問題とされ

てきた。⁽³⁾これに対し本稿は、一九世紀から二〇世紀始めになされたヨーロッパ人による北スマトラの内陸部バタック地域の調査をとりあげ、バタック人が彼らに自覚的に「カニバリズム」を提示した事例を論じる。それにより、ヨーロッパ人の調査者に自文化を異化することでその存在意義を示した、介入者の側から問題を考察したい。

二 北スマトラと「食人」風聞

北スマトラに「人喰い」が居住するという風聞は古くから語られていた。北スマトラの「食人」は、一八四〇年代にバタック地域を踏査したヨーロッパ人の記録に目撃されたものとして登場する。それによると、犯罪人（特に男の姦通者）や負傷したために隷属民として活用できない戦争捕虜を時として食したことがうかがえる。⁽⁴⁾こうした習慣が古くから存在した可能性は否定できない。筆者はただ、「食人」慣行が歴史的事実として存在し、それが当該社会でいかなる意義を有していたかということは、直接的な

史苑（第六〇巻一号）



北スマトラ地図表

考察対象としない。それよりも、「人喰い」話がいかなる場面
で誰によって語られ、そして聞き手はどう受け取ったの
かを考察する方が、本稿の目的にはより重要であると考え
るからである。

遅くとも九世紀よりアラブ人の旅行記には、北スマトラ
のファンスール（バルス）やランブリ（アチエ）の内陸部
さらには周辺のニアス島やアンダマン諸島に「人喰い」が
居住することが記されている。一三世紀の終わりに北スマ
トラに寄港したマルコ・ポーロは、ブルラク、サムドラ、
ダグロイアンの内陸部とアンダマン諸島に「人喰い」が居
住するとしている。とりわけ悪天候で五ヶ月間の逗留を余
儀なくされたサムドラでは、「人間をすら捕らえて食用にあ
てるという野獣に近い土人を警戒して」港近くに五つの木
製櫓を設備して、その期間を過ごしたという。一方フビラ
イ・ハーンの信任厚いポーロをこれらの港市支配者達は厚
遇し、ポーロは無事滞在できた。彼の記述に特に危険な目
に遭遇したという箇所はない。むしろサムドラではやがて
現地人とポーロ一行との間に信頼関係が生まれ、人々は食
糧やその他の物品を売りに来たことが述べられている。

その後一五〜一七世紀になると東南アジアは、交易の時
代を迎え、北スマトラは胡椒や森林生産物の産地となった。
サムドラ、アチエ、バルス、デリ等の港市が積出港として

繁栄した。この時代に北スマトラを訪れたヨーロッパ人や
アラブ人達は、以前にも増してヴィヴィッドに「食人」を
語っている。一四三五年にサムドラを訪れたニコロ・デ・
コンティの記述はその典型である。

セイロン島からコンティはダブロボナという島にある
立派な町へ渡った。その島を土人はシャムテラ（スマ
トラすなわちサムドラ）と呼ぶ。コンティはそこに一
年間滞在した。その町の周囲は六マイルで、その島の
商品を取引しているたいへん高貴な町である。そこか
らコンティは順風にのり二〇日間航海し、右側にアン
ダマニアと呼ばれる島を見ながら去った。このアンダ
マニアは、黄金の島を意味し、周囲八〇〇マイルで、
住民は人喰いである。外来者は天候のためやむを得な
い限り誰もそこに行かない。つかまるとただちにそれ
らの残忍な人達が人々を切り刻み、食べてしまうから
である。コンティが言うには、ダブロボナは周囲が六
〇〇マイルある。人々はたいへん残忍で、習慣は野
蛮である。――（中略）――彼らは偶像崇拜者である。こ
の島は通常より大きい胡椒及び長胡椒、龍腦とまた金
を莫大な量産する。――（中略）――この島の *Batech*（バ
テクIIバタク）と呼ばれるところに、人喰いが住ん
でいて、常に彼らの近隣の人々と戦いを行う。彼らは

頭蓋骨を宝物として保存する。何故なら彼らは敵を捕らえると首を切り落とし、その肉を食べ、頭蓋骨を貨幣の代わりに使うために蓄えるからである。何か物を買いたいときには、一首あるいはより多くの頭蓋骨を支払う。そして家に頭蓋骨を最多有する者が最も裕福であるとみなされるのである。

(一) 内は引用者

コンティがサムドラに一年間滞在し、「人々を切り刻み、食べてしまふ」黄金の島アンダマニア（アンダマン諸島）と「人喰い」が住み、胡椒と多量の龍腦と金を産出するバタック地域について聞き書きしたものである。コンティはこうした「食人」風聞によりアンダマニアにもバタック地域にも足を踏み入れなかった。

こうした内陸民や島民の「人喰い」の話を来訪者に信じ込ませるのに最も貢献したのが、港市に居住した人々であった。通常他地域から来訪者が来航すると、まず港市支配者と接見した。一八二三年デリを訪れたイギリス東インド会社の職員アンダーソンは、デリのスルトタンに接見し、その際スルトタンの兵士を勤めていた内陸部のシマルングンのバタック人より、彼が七度人肉を食したことを聞かされた。またパクパク出身のバタック人の兵士の一人も、かつて何度か食人をしたことがあることを彼に語ったという。アン

ダーソンは、この他同じく北スマトラの港市バトゥバラを訪れた際にも、王家に仕えるバタック人から「人喰い」の体験談を聞かされた^①。また一七世紀終わりにアチエを訪れたハミルトンは、アンダマン諸島出身の元奴隷より、アンダマン島人がニコバル諸島を毎年攻撃して島の住民を多数略奪していたことを聞かされたことを記している^②。

現地に直接足を踏み入れてない段階では、こうした港市居住者の話がきわめて高い信頼性を呼び、旅行者達の話題になっていく。来訪者は「人喰い」話に影響されて、ポーロやコンティのようにスマトラ島内陸部やアンダマン諸島に足を踏み入れることにきわめて消極的であった。サムドラはしたがって、コンティの言葉を借りれば、スマトラ他地域やアンダマン諸島の産物を集荷し、外来商人がそこで安全に取引できる「高貴」で「立派な」港市であった。

サムドラの後スマトラではアチエが、一六世紀中葉から一七世紀中葉にかけて北スマトラや中部スマトラの胡椒や金や森林生産物、さらには周辺の島々の産品の積出港となつた。アチエは、一五一一年にマラッカを占領して独占交易体制を構築しようとしたポルトガルの高圧的政策を嫌つたアジア商人達を引きつけ、多様な地域からの来訪者が逗留する国際貿易港となった。この時期の来訪者によると、アチエが影響力を行使した北スマトラおよび中部スマトラ沿

岸部の内陸に「人喰い」が居住するとされている¹³。また規模こそアチエに及ばなかったが、バルスやデリも一五—一七世紀に繁栄する港町となった。そしてこれらの港の後背地にも「人喰い」が居住し、彼らはきわめて「好戦的」であるという風聞が、旅行者の間で語られていた¹⁴。内陸世界と外部世界との間を港市支配者は、どのように介在していたのか。

三 二つの顔を有した港市支配者

港市は産品を輸出するため、後背地の生産地としかるべき関係を構築することが必要であった。上であげたサムドラ、アチエ、バルス、デリのいずれの港市支配者も王国を建国するにあたり、後背地住民と確固たる関係を形成したことを伝えている。

一四—一五世紀に、金や龍腦そして胡椒の積出港として東南アジアで最も繁栄した港市の一つとなったサムドラ（パサイ）の建国を伝える『パサイ列王伝』によると、サムドラの初代王となったメラ・シルは、竹のなかより生まれた「竹姫」と象に育てられた男の子との結婚により生まれた子供であるという。「竹姫」は植物のエネルギーを体現した存在であり、象は森の聖なる動物であり、それにより育てら

れた男は動物を統べる力を有したと考えられよう。この両者より生まれたメラ・シルは内陸森林世界の動植物の力を併せ持つ存在であった。彼は成長した後、弟のメラ・ハスムと不和になり、住むべき地を求めてパサガン川上流の内陸地を訪れた。その地の人々はメラ・シルを迎え入れしばらく逗留させた。メラ・シルは鬪鶏をして時を過ごした。彼は負けると賭けた物を支払ったが、勝つても決して相手に金品を要求しなかった。人々は彼の気前良さと豊かさを評価して、彼が人々の王たる人物にふさわしく、彼らの王とすることに決めた。こうしてメラ・シルは、後背地の人々の支持を得ることができ、彼らの協力のもとに沿岸部に王国を建国したと『列王伝』は語っている。

この後背地において龍腦や金が産出され、また遅くとも一五世紀始め以降胡椒が栽培されるようになった。「食人」風聞を有する一方で、サムドラは内陸民と確固たる関係を構築していたのである。

また一五世紀の終わりに建国されたアチエは、一六世紀の終わりから一七世紀中葉にかけて隆盛し、とりわけ一七世紀前半に君臨したスルタン・イスカンドル・ムダの時代に全盛期を迎えた。彼の時代に編纂された『アチエ王統記』は、イスカンドル・ムダがそれまでのスルタン達と異なり、内陸部の動物や人々を畏服させる力を有したことを唱えて

いる。¹⁹それまでの支配者には呪術を用いて災いをもたらすことのできた後背地のバタック人にとって、イスカンドル・ムダ以降のアチエの سلطانは彼らの力を超えた神聖王となった。北スマトラ内陸部のガヨ地域とバタック地域のカロおよびシマルングンの地に、イスカンドル・ムダは代官を任命した。彼ら代官達はその地の住民達の尊崇を得、定期的にアチエの سلطان あるいは（カロとシマルングンの代官は） سلطان からその権威を保障されたデリの سلطان に貢納した。²⁰

また龍腦や安息香の輸出港であったバルスには、下バルス王家と上バルス王家が存在した。下バルス王家に伝わる王統記は、初代の下バルス王がバルスに王国を建国する前に、貴重な森林生産物の産地であるトバのシリンドウンとパッサリブの地に滞在し、人々の尊崇を得、これらの地に代官を任命したことを伝えている。また上バルス王家の王統記は王家の祖先がトバの出身で、バルスに到達するまでに龍腦の産地のパクパクの地に勢力を扶植したことを伝えている。一七世紀の後半バルスに商館を構えたオランダ東インド会社の記録によると、この両王家とそれぞれが影響力を有する後背地との結びつきは強く、龍腦や安息香が王家の命により、パクパクとトバよりバルスに届けられたことがわかる。²¹

史苑（第六〇巻一号）

またカロやシマルングンの産物の積出港であったデリの سلطان の権力基盤も、アチエよりその権威を保障されたことのみあるのではなかった。一三世紀から一六一二年に隆盛したアル王国のあとを継いだデリは、アルの繁栄を支えた森林産物を生み出す植物の象徴プトウリ・イジョ（「みどり姫」との結婚により、内陸世界の力に与っていることを唱えた。プトウリ・イジョがデリの سلطان と結婚することで、内陸部の人々に繁栄をもたらすものとカロやシマルングンの人々に信じられた。²²

そしてこれらの港市支配者は、他方で港町に多様な地域からの商人や旅行者が滞在できる空間を保障していたことも語っている。『パサイ列王伝』は、メラ・シルが海岸部に建国した頃、メツカにいたシャイフ・イスマイルがムハンマドの遺言に従い、カリフの命で東方のサムドラに向け人々をイスラームに改宗させる航海に出かけたことを述べている。イスマイルは、途中南インドのマーバル（コロマンデル）に立ち寄り、その地の王族の協力を得て彼らとともにサムドラに赴いた。一方メラ・シルは、その頃夢でムハンマドよりイスラームに改宗するよう託宣を受けた。船でやって来たイスマイルと出会ったメラ・シルは、お告げに従ってイスラームに改宗し、 سلطان ・マリクル・サレーを称したという。²³インド洋と東南アジア海域との接点に位置す

るサムドラにとつて、西アジアや南インドとの関係が重要であったことは言うまでもない。以降サムドラは、これらの地域からの商人が多数訪れる繁栄する港市となり、東南アジア海域世界におけるイスラームの先進地とみなされた。

またポルトガルと対抗して繁栄したアチェは、一五三〇年代よりオスマン・トルコと接触を持ち始めた。そして一六世紀の中葉以降アラブ出身のウラマー達を積極的に受け入れるとともに、東南アジアのムスリムのメッカ巡礼の出发地また巡礼帰還者の受け入れ地ともなり、「メッカのペラダ」と呼ばれるようになった。イスカンダル・ムダの時代に全盛期を迎えたアチェの王都は、トルコやアラブ、ペルシャなどの西アジア出身者をはじめ、グジャラート、マラバール、コロマンデル、ベンガルなどの南アジア出身者、ペグーやアユタヤ、マレー半島、そしてスマトラやジャワ、チャンパなどの東南アジア出身者、中国、ヨーロッパからの商人も集う、コスモポリスとなった。『アチェ王統記』によると、アチェはオスマン・トルコのカリフよりもその繁栄を賛美され、イスカンダル・ムダは古のアレクサンダー大王の生まれ変わりだとたえられたという。アチェは「世界帝国」を自任したのであった。

同様に、バルスの下バルス・上バルス両王国の王統記も、王国が後背地と強固な関係を有するとともに、アチェやオ

ランダなどの外部勢力からその存在を保障されたことを語っている。またデリ王家はアレクサンダー大王の血統を有し、かつアチェよりその存在を保障されたことを唱えていた。²⁴⁾この様に港市支配者は、内・外二つの顔を有しながら、内陸部住民と外来者とそれぞれ関係を構築していた。両者の介在役であった港市支配者にとつて、外来者が内陸部住民と直接接触することは、その存在基盤そのものを脅かしかねないことであった。また後背地住民にとつて外来者は、しばしば外から病気を持ち込んだり、彼らを捕らえて隷属民として売りさばく厄介な存在であった。内陸民の多くは、外来者との接触を港市居住者に委ねようとした。「食人」は、外来者と内陸部住民とを緊密に接触しにくくしようとする状況下で、開花した語りといえる。こうした風聞により、上記でみたように外来者は内陸部住民と接触することに消極的になり、結果として港市支配者は外来商人と内陸民との仲介交易をほぼ独占的に司つたのである。

四 ヨーロッパ人の調査活動と現地社会の介在者

「食人」風聞は、外来者―港市支配者―後背地住民の安定的關係が崩壊すると意味をなさなくなる。一七世紀終わりにから一九世紀始めにかけて移民を使い胡椒や米の生産活動

を進展させたアチエの周辺部では、「食人」風聞は消滅していった。また一七世紀前半のアチエの全盛期に「人喰い」が居住するとされた中部スマトラでは、一六六三年アチエによる交易活動の高圧的統轄を嫌ったミナンカバウの首長たちが、オランダ東インド会社と条約を結び、オランダと直接金や胡椒の取引にあたることとなった。内陸部住民が外来者と直接交易にあたることとなり、この地域の「食人」風聞も消滅していった。

これに対しバルスやデリは、内陸部と従来の関係を保持した。オランダは一六六八年バルスにも商館を設けた。しかしバルスでの交易活動は下バルス王家と上バルス王家の介在のもとに展開したので、後背地の「人喰い」風聞はその後も存続した。またデリ周辺の東岸の場合も同様であった。風聞が一九世紀にも存在していたことは、先の一八二三年のアンダーソンの記録が語るとおりである。

オランダは、一七世紀の後半から一八世紀の前半にかけてスマトラ西岸のパダンを中心にサリダ、インドラプラ、パリアマン、ティク、アイルバンギス、バルスなどで交易活動に携わった。これに対し一八世紀の中葉からイギリスがインドより安価な綿織物を持ち込み、西岸のベンクールを中心にしてこの地域で交易活動を拡大し始めた。イギリスは一七五一年にナタル、一七五六年にタパヌリに拠点を設け、

オランダとの競合を有利に展開するために、北スマトラの後背地との関係の強化を図り始めた。

一七七二年タパヌリの後背地の森林生産物の入荷を促したかったイギリスは、東インド会社職員のみラーとホロウエイに内陸部を訪問させた²⁸。二人は、沿岸部のマレー人の案内のもとに、タパヌリに近接する内陸部ルムトを訪れた。その地の首長は二人を迎え入れた。首長にもてなされた村の来客用の家屋に、彼らは頭蓋骨が掲げられているのを見つけた。二人は、それが二ヶ月前に食した敵のものであるという説明をうけた。みラーは、首長に肉桂の種類や採取方法さらにはルムトについて情報をもとめた。しかし、首長からみラーは満足な情報を聞き出せなかった。タパヌリの後背地は下バルス王家が関係を構築している地であり、当時ここにイギリスが直接介入することは困難であった。またナタルに駐在していたイギリス人館長ネアンのもとに、一七七五年イギリス影響下にあった近郊のバタック人首長の一族が、敵対関係にあった村の首長ニアビンに彼らの首長が殺害され「喰われた」と訴え、救済を求めた。ニアビンの村がイギリスの影響外にあったにもかかわらず、ネアンは一五〇一六名の部隊を率い、ニアビンの村を征伐するため遠征した。しかし、ネアン自身が遠征中に相手方の銃弾に倒れた。ネアンの遺体は仲間の手で帰還したが、

同じく凶弾に倒れた一人のマレー人ともう一人の非マレー人（おそらくバタック人）の遺体を運び出す余裕はなかった。彼らはその後「喰われた」のだと、ネアンの遠征部隊に参加した人々は口を揃えて語った。イギリスの影響外にある村では、「食人」が残忍に行われていることをイギリス側に語りかけたのであった。

一九世紀に入りイギリスのペナン・シンガポールを拠点とする海峡植民地が形成されると、マラッカ海峡域の交易活動は活性化した。これに応じ、スマトラ島の後背地でもイギリス側との取引に関心を示し始めた。先に紹介した一八二三年に東岸部のデリやバトゥバラを訪れたアンダーソンは、ペナン駐在のイギリス東インド会社職員であった。彼はバトゥバラを訪問した後、中流部まで船で航行できるアサハン川河口の港市アサハンを訪れた。アンダーソンは、内陸部の商業活動の調査のためヨーロッパ人としては初めて、中流部の産物の集荷地ムントウパネイまで遡った。その地の首長はバタック人で、アンダーソンによると周辺二〇村に影響力を行使した有力首長であった。沿岸マレー地域と内陸バタック地域を往来したこの首長は、流暢なマレー語でアンダーソンと会話した。首長は、カニバリズムに関心をもつアンダーソンに、彼の影響下にあった村で六日前に食されたという人間の頭蓋骨を臣下に命じて運び込ませ

た。アンダーソンは、その犠牲者が五分程で食べ尽くされたことを人々から聞かされ、その頭蓋骨を見て強い衝撃を受けたことを記している。港市支配者と同じくムントウパネイの首長は、アンダーソンの理解を超える「野蛮な」内陸世界と外来者の世界とを仲介できることを彼に示したのである。

同様に西岸のタバヌリと後背地との交易ネットワークの強化を図ったイギリスは、一八二四年四・五月にトバ地区に二名のバプテスト派の宣教師を派遣し、内陸部の人々と接触を試みた。彼らは、タバヌリへ交易のためやってくる後背地のシリンドウンの首長のもとに一〇日程滞在した。二人は、シリンドウンが人口一〇万人以上かかえる豊かな農業地帯で、この地が多様な商品作物を栽培できる可能性を指摘している。そして彼ら兩名を泊めた首長は、たいへん友好的で、交戦中の敵対する村人をも無事村に返したことを述べている。バタック人のカニバリズムを聞かされていた兩名は、首長に「食人」の体験について尋ねた。すると首長は彼らに、一二ヶ月前にタバヌリとシリンドウンの間でしばしば内陸部からの交易者を襲っていた村人達二〇人を一日で食したことを語った。海岸部との交易活動の活性化を望んでいたイギリス側に対し、敵対者のなかでも交易活動の妨害者が「食される」ことを説いたのであった。

一八二四年イギリスとオランダとの間でロンドン条約が締結され、マラッカ海峡を挟んでスマトラはオランダの勢力下に、マレー半島はイギリスの勢力下に置く取り決めがなされた。イギリスはスマトラから撤退した。他方オランダは、ミナンカバウ地域で展開していたスマトラ沿岸部と内陸部との交易ネットワークの改編をもくろんだパドリ軍団の活動と対抗しつつ、パダンを拠点にナタルから北スマトラへも徐々に勢力の拡大を図った。

その一環として一八三四年オランダは、ボストン協会の宣教師二名をタパヌリから内陸部のシリンドウンに派遣した。だがタパヌリ内陸部のトバ地区は、一八三二年頃ミンカンバウからパドリ軍団の侵入を受けたため、内陸部住民は外部勢力の進出を警戒していた。宣教師二名はパドリ派との関係を疑われ、接近を拒否したシリンドウンのフタティンギの首長によって殺害された。オランダ側は、二人が「食された」ものと理解した。²⁹⁾

一八三七年パドリ派の主要勢力を制圧したオランダは、バタック地域南部のマンダイリン地区とアンコラ地区に影響力を拡大し始めた。そして一八四〇年にバタック地域南部からさらに北隣のトバを再調査するためユングフーンを派遣した。ユングフーンは、アンコラヤトバのシリンドウンの首長の案内のもとに一年半にわたりこれらの地域を踏

査した。シリンドウンの一首長グル・スンピランの案内のもとに、ユングフーンはフタティンギを訪れた。グル・スンピランから彼は、フタティンギがかつては多くの人口をかかえ繁栄した村であったが、宣教師を「食して」以来人が減り、貧しい村になったと聞かされた。ユングフーンは、これを「天罰」が下ったものとみなし、フタティンギが当時一〇戸のみすばらしい家屋よりなる寒村であることを記している。³⁰⁾ オランダとの接近をはかるグル・ティンギの説明であった。

こうしたトバの首長らの介在のもとにユングフーンは、「食人」の場面を目撃したという。彼はその場面を次のように語っている。

敵が捕まった場合、慣習または（につつき敵が、生々しい復讐の欲望に抗しきれない相手方の手に落ちたときには）裁量によって犠牲者が選ばれ、食する日が決定される。使者が、親しいあるいは同盟している首長やその臣下たちのもとに送られ、供犠への招待が行われ、祭りのごとき準備がなされる。数百人の人々が集まってくる。犯罪者は通常村の外で杭に縛られるが、見物人が入るのに村が十分に大きいときは、村のなかで行われることもある。たくさん火が焚かれ、音楽が奏でられる。——（中略）——彼らに言わせると、こ

ヨーロッパ人の調査活動と介在者の「食人」文化の創造（弘末）

ういうやり方で復讐心を満足させることは楽しみであり、食人によって慰められる気持ちは、他の何事にも比することが出来ないという。すべての人が、こうした欲情にかられてナイフを取り出す。首長または侮辱された者が、最初の肉を切り取る。それは好みによって、前腕の場合もあれば頬肉の場合もある。彼は肉片を取り上げ、ほとぼしる血をうまそうに吸う。そして急いで火のもとに行き、それをむさぼり喰うまえに、少し焼く。――（中略）――通常八〜一〇分で犠牲者は気を失い、一五分たつと大抵死んでしまう。

（一）内は引用者

ユングフーンによれば、こうした公の場での「食人」が彼の滞在中に、トバ（シリンドウン）、シゴンプロンとピラ川上流部の三ヶ所で行なわれたという。彼の記述内容が、本当に目撃したものなのかどうかを確定することは、本稿にとつてさほど重要でない。それがたとえ伝聞によるものであったにせよ、ここで大事なことは、彼を逗留させたバタック人首長達の提供した情報が彼の記述に大きな影響を与えたことである。

彼ら首長達は、オランダから派遣されたユングフーンが「食人」を警戒し、それに高い関心を有していることを心得ていた。だからこそフタインギに彼を案内した際に、上

記の様なオランダ側に配慮した説明をしたのであった。他方で彼らはまた、トバやアンコラでの「食人」の話を詳しくユングフーンに語った。ユングフーンは、上記の事例の他、シリンドウンの首長達から、バンダルナホルの首長が密かに戦争捕虜を「食した」ことや、アンコラのシヒジュクの首長が「食人狂」で、自分の隷属民を次々と喰うことを聞かされた。オランダから調査を依頼された彼は、その調査記録『スマトラのバタ人』（二巻）のなかで「特にバタ人のカニバリズムについて」という章を設けて、これらのバタック人の「食人」を記述している³³。彼ら首長達は、それまで外来者に知られていなかった「食人」情報を提供することで、オランダが関心を寄せたこの地域をより特異化することができたと見える。

オランダはユングフーンの調査の翌一八四二年、その踏査地域にあたるアンコラとシゴンプロン、シリンドウン、およびその周辺のシパフタル、パンガリブアン、シゴトム、シラントムの領有を宣言した³⁴。これらの地域にオランダの実効的支配が及び出すのは一八七二年以降のことであるが、オランダはこれらの地域の有力者がオランダへの服属の意思を表明したと判断し、まず名義上の領有を宣した。結果として彼ら首長達は、オランダ側との仲介者としての存在価値を高めたのであった。

五 「食人」説話の最終局面

「食人」の話は、外来者と地元住民とをめぐる秩序が崩壊したことを表すものでは決してない。ユングフーンの踏査以降、ヨーロッパ人の間でバタック地域への関心が高まり、トバ地区ではこの後一八六一年よりキリスト教の布教活動が始まり、オランダ植民地政庁も一八七〇年代にはこの地域への影響力の行使を本格化した。これに対し、植民地体制下で勢力の拡大を図ったトバ・バタックのグループはキリスト教会に接近し、反オランダ派は一八七八年より神聖王シ・シンガ・マンガラジャを奉じてオランダと戦争を始めた。こうして外来者と地元住民との関係が混乱した状態において、トバ・バタックにとつてもつとも切実な問題は、変動する状況を司る力は何であり、いかにしてその力に与るかということであった。そこにおいて「食人」は、トバ・バタックの人々にも、キリスト教会の宣教師にもオランダ植民地官吏にも、ほとんど話題とならなかった。

外来者と地元住民との関係が介在者をおして保持されていて、外来者が内陸部深くやってきたとき、「食人」は強調される。トバ地区とシマルングン地区のほとんどは、一九世紀終わりにはオランダ植民地政庁の影響下に置かれるに至った。北スマトラの中で最も遅くまで植民地勢力から

独立を保っていたのが、トバ湖畔西北部のパク・パク地区であった。一八八〇年代から二〇世紀始めにこの地域を踏査した旅行者は、この地区のインフオーマント自身から多数の「食人」を行ったことを聞かされた。

一八八七年、ドイツ人探検家フォン・ブレンナーは、デリのプランテーション経営者やオランダ政庁、キリスト教会の支援のもとに、東岸のデリからカロ地区さらには未だオランダの影響力が及んでないパク・パク地区そして北部トバ地区の踏査旅行を実施した。その成果は七年後に『スマトラの人喰い族訪問』というタイトルで出版された。彼が聞いた「食人」の事例は、カロ地区と近接したパク・パク地区のブンガバダンで出会ったその地の有力首長の情報にもとづくものであった。それによるとその地の首長は、デリのプランテーションを逃亡したと思われる一一名の中国人クラーリーを村人とともに食したという。デリのプランテーション経営者の支援を得て旅行中のブレンナーを意識した、パク・パク側の首長の説明であった。

パク・パク地区は、当時オランダとアチエ戦争（一八七三～一九一三）を展開していたアチエ王国とも近接していた。一九〇四年アチエの内陸部のガヨ、アラサ地域を制圧し、パク・パク地区まで南下したオランダ人のケンペースに、トバ湖畔北西部のクタラジャの首長は、近年彼の村近くにやつ

てきた一三名のアチェ人の一団を襲い「食した」と語った³⁷。先の場合と同様、来訪者との関係を配慮した「食人」であった。

二〇世紀の始めになると、オランダ政府は加速度的にその勢力圏を拡大していった。パク・パク地区がオランダ支配下に入るのも時間の問題となりつつあった。またパク・パクの住民をはじめバタック人が、食人を行うことは外来者の間で「周知」となりつつあった。こうしたなか一九〇五年、オランダ政府よりこの地区の調査を認可されたフォルツがパク・パク地区にやってきた時、クタラジャに近接するクタウサン出身の四〇歳前後のインフオーマン³⁸トは、既に五人以上を食したと彼に語ったという。「食人者」というレッテルから逃れられない状況下では、介在者自身が偉大なるカニバリストを自称することで、来訪者にその存在価値を印象づけたのであった。フォルツは、彼のインフオーマントが二五年間に五〇人食したものと推定し、この地域の人々が平均毎年二名程食したものと算定している。

このほか同じ頃、パク・パク中央部のク・パスの村落間抗争で八名の女性が食されたことがオランダ政府の話題となっていた。従来バタック人の間では、婦女子は食人の対象にならなかつた。これが事実であるのかどうかは問題ではない。大事なことは、パク・パクの人々がこの地の「食人」が、他

のバタックのものを超えたものであることを外来者に語りかけたことである。

バタック地域は一九〇八年までに、パク・パク地区も含めすべての地域がオランダ植民地政府の支配下に置かれるに至った。トバ地区やパク・パク地区では、有力首長が植民地官僚の末端に組み込まれ、植民地体制下でその地位を保障された。彼ら仲介者の役割は、植民地政府に評価されたいえる。オランダはしかし、やがてこうした首長達が亡くなると、統治機構を再編成し、その後には官吏養成学校の卒業者を据えていった。かつての介在役の首長世代は、植民地体制の確立後姿を消していった。オランダはまた植民地体制下で「食人」を禁止した。こうした中で、人々の「食人」の語りは後退し、「食人」は過去の事象となつていった。

六 まとめ

「食人」の語りに、ヨーロッパ人と非ヨーロッパ人とを分ける露骨な区分が存在することを指摘したのは、W・アレングズである。彼は著書『人喰いの神話—人類学とカニバリズム』のなかで、「食人」が社会的慣行として存在したとする従来の説明に疑問を呈し、それらの説明の根拠となつた情報は信頼が置けないのに、他集団には「食人」が存在す

るとして、それらを事実であるかの如く論じた多くのヨーロッパ人の「われわれ」と「彼ら」を分化するバイアスを問題とした。そして「食人」の考え方が共有されるようになる過程において、人類学が無批判に手を貸してきたことを彼は指摘した。⁴⁰⁾

これに対し本稿が問題としてきたのは、そうした「われわれ」と「彼ら」とを区分する役割を担った介在者の存在であった。前近代における国際社会と地元社会の間に介在した港市支配者、そして拡大する植民地主義に対し、ヨーロッパ人と非ヨーロッパ的習俗を有する人々とを仲介したパタックの首長達は、こうした存在であった。彼らは外来者に対し、その存在価値を保持するために地元社会を「異化」して提示したのである。ヨーロッパ人がスマトラ島で「野蛮」や「特異性」を発見したというよりも、彼ら介在者を通して、外来者はその地の「野蛮」や「特異性」を聞いたり、見せられたのであった。

また彼らは、植民地支配をもたらした現地側の主体でもあった。彼らは、大体植民地体制下でその地位を保障された。その意味では彼らのもくろみは、達成されたといえる。しかし、トバ地区やバクバク地区での植民地首長としての地位は、子々孫々まで保障されたわけではなく、概して彼らの世代までであった。後に植民地体制下の官僚制度

や学校制度が確立した段階でみると、彼ら首長達の存在は、まるで媒介変数であったかのように、表舞台から消え去っている。あとに残された「現地文化」は、ヨーロッパ人の知の枠組みをもとに再構成され、「博物館」化されていく運命をたどる。文化の植民地化あるいは「オリエンタリズム」が議論されるのは、こうした段階からである。本稿はこの異化された「現地文化」の成立過程を、現地社会と外来者との間の介在者の果たした役割をとおして考察したものである。

〔付記〕本稿は、もう二〇年程前に森弘之先生のもとでの研究会で、「ヨーロッパ人旅行者とパタック人との出会い」等のタイトルで発表させていただいたものを原型としている。発表後森先生が、歴史は出会いのなかで生じる思い込みや誤解から出来上がっていくものとおっしゃられたことが、以後の研究の支えとなった。先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

注

(1) 土屋健治『インドネシア思想の系譜』勁草書房、一九九四年六八―七四頁。A. Vickers, *Bali: A Paradise Created, Hong Kong, 1990*, pp. 78-91.

ヨーロッパ人の調査活動と介在者の「食人」文化の創造 (弘末)

- (2) J. van der Putten, "Taakvorsers en hun informanten in Indië in de 19e eeuw Von de Wall als politiek agent in Riau", *Bidragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde*, vol. 151, no. 1, (1995), pp. 44-75.
- (3) W. Arens, *The Man-Eating Myth: Anthropology and Anthropophagy*, New York, 1979 (折島正司訳『人喰いの神話—人類学とカニンリスム』岩波書店, 一九八二年) 岡倉登志『野蛮』の発見—西欧近代のみたアフリカ』講談社, 一九九〇年, 八〇—八七, 一九六—一九八頁。
- (4) F. Junghuhn, *Die Battalinder auf Sumatra*, vol. 2, Berlin, 1847, pp. 156-161, and E. M. Loeb, *Sumatra Its History and People*, Kuala Lumpur and Jakarta, 1972, pp. 34-36.
- (5) 慣行として「食人」が存在した場合、当該の社会の人々はそれを慣習に従って実行するまでで、通常そこに特別な意義付けや説明を持ち出す必要はない。一方本稿が問題としたのは、「食人」がなされたかもしれないことやなされたことに大きな関心を払う人々が存在した歴史的事実であり、またそうした人々に対し「人喰い」のレッテルを貼られた当該の人々がどう対応したかということである。「食人」の語りを扱うことで、「自文化」と「他文化」を異化したり、同化する役割を果たす存在が考察できるからである。なお、「食人」をめぐる風聞と事実との連関については、Arens, *The Man-Eating Myth*, および栗田博之「ニューギニア「食人族」の過去と現在」(春日直樹編『オセアニア・オリエンタリズム』世界思想社, 一九九九年所収) 参照。
- (9) G.R. Tibbets, *A Study of the Arabic Texts Containing*
- Material on South-East Asia*, Leiden and London, 1979, p. 25, 28 and 45.
- (7) ヴェルノ・ホーロ (愛宕松男訳注)『東方見聞録2』平凡社, 一九七一年, 一五一—一五五, 一五七頁。
- (8) 同上書, 一五五頁。
- (6) Nicolo' de' Conti, "The Travels of Nicolo' Conti, in the East", in Major, R. H. ed., *India in the Fifteenth Century*, London, 1857, pp. 8-9.
- (10) J. Anderson, *Mission to the East Coast of Sumatra*, in 1823, Edinburgh and London, 1826, pp. 34-35.
- (11) *Ibid.*, p. 122.
- (12) A. Hamilton, *A New Account of the East Indies*, London, 1930, vol. 2, p. 36
- (13) "The Expedition of Commodore Bealieu to the East-Indies", in Harris, J. ed., *Navigantium atque Itinerantium Bibliotheca: A Complete Collection of Voyages and Travels*, London, 1744, vol. 1, p. 742.
- (14) *The Book of Duarte Barbosa*, vol. 2, London, 1921, p. 188. トメ・ペービス (生田滋・池上岑夫・加藤栄一・長岡新治郎訳注『東方諸国記』岩波書店, 一九六六年), 二九〇頁。
- (15) A. H. Hill ed., "Hikayat Raja-Raja Pasai", *Journal of Malayan Branch of the Royal Asiatic Society*, vol. 33, part 2, June, 1960), pp. 46-59.
- (16) Teuku Iskandar, *De Hikajat Atjéh*, The Hague, 1958, pp. 144-146 and 164-165.
- (17) K. F. H. van Langen, "Bijdrage tot de kennis der Gajoe-landen", *Tydschrift der Koninklijk Nederlandsch*

- Aardrijkskundig Genootschap*, vol. 5, (1881), pp. 34-37, P. A. L. E. van Dijk, "Rapport betreffende de Si Balengoensche landschappen Tandieng Kasau, Tanah Diawa en Si Antar", *Tijdschrift voor Indische Taal, Land- en Volkenkunde*, vol. 37, (1894), p. 179, and E. Netscher, "Togies in het gebied van Riouw en onderhoorigheden", *Tijdschrift voor Indische Taal, Land- en Volkenkunde*, vol. 14, (1864), p. 384.
- (27) J. Drakard ed., *Sejarah Raja-Raja Barnas, Jakarta and Bandung*, 1988, pp. 195-202.
- (28) *Ibid.*, pp. 123-135.
- (29) VOC 1272, "Raport vanden ondercoopman Francois Backer aengaende sijn verrichten voor Baros", (30 Aug. 1669).
- (30) J. Tideman, *Simeloengoen: Het land der Timoor-Bataks in zijn vroegere isolatie en zijn ontwikkeling tot een deel van het cultuurgebied van de Oostkust van Sumatra*, Leiden, 1922, pp. 68-71, W. Middendorp, "Oude verhalen, een nieuwe geschiedbron", in *Festbundel uitgegeven door het Koninklijk Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen bij gelegenheid van zijn 150 jarig bestaan 1778-1928*, Welevreden, 1929, vol. 2, pp. 164-176.
- (31) Hill ed., "Hikayat Raja-Raja Pasai", pp. 55-59.
- (32) Teuku Iskandar, *op. cit.*, p. 167.
- (33) A. C. Milner, *Kerajaan: Malay Political Culture on the Eve of Colonial Rule*, Tucson, 1982, pp. 72-73.

史苑 (第六〇卷一号)

- (25) 類似した事例はいくつか挙げられよう。例えば一九世紀後半にアフリカを旅行したスタンリーは、奴隷貿易を司るアラブ商人より、中央アフリカ内陸民が「食人種」であったことを吹き込まれた。アラブ商人はここにヨーロッパ人を入れたくなかった(アレンズ『人喰いの神話』一一六頁)。またマルコ・ポーロは、フビライ・ハーンが制圧できなかったチング(日本)を黄金の島として描いている。当時元と日本との間では私貿易が営まれていたが、ポーロは日本に「人喰い」の習俗があると述べている(マルコ・ポーロ『東方見聞録』一一九-一四〇頁)。その他、外来者に競合する相手方集団との接近を避けるため、他集団に「食人」の風習のあることを説いた事例は多く。なお、東南アジアの中で特に北スマトラ周辺で「食人」風聞が開花した点に関しては、拙稿「北スマトラとニリウイジャヤ」港市の隆盛と後背地の「食人」風聞 — 『MUSEUM 東京国立博物館美術誌』五三七号、一九九五年、一四-二二頁を参照された。
- (26) W. Marsden, *The History of Sumatra*, reprint, Kuala Lumpur, New York, London and Melbourne, 1966, pp. 369-373.
- (27) *Ibid.*, p. 394.
- (28) Anderson, *op. cit.*, pp. 147-148.
- (29) "Verslag van eene reis in het land der Bataks, in het binnenland van Sumatra, ondernomen in het jaar 1824, door de Heeren Burton en Ward, zendingen der Bapisten", *Bijdragen tot de Taal, Land- en Volkenkunde*, vol. 5, (1856), pp. 299-300.
- (30) S. Coolma, *De Zendingseeuw voor Nederlandsch*

- Oost-Indië*, Utrecht, 1901, pp. 305-306.
- (31) Junghuhn *op. cit.*, p. 113.
- (32) *Ibid.*, pp. 158-160.
- (33) *Ibid.*, pp. 161-162.
- (34) M. Jousstra, *Batakspiegel*, Leiden, 1910, p. 31.
- (35) この点については、拙稿「インダネシアの民衆宗教と反植民地主義（池端雪浦編）『変わる東南アジア史像』山川出版社、一九九四年所収）を参照された。
- (36) J. F. von Brenner, *Besuch bei den Kannibalen Sumatras* : *Erste Durchquerung der unabhängigen Batak-Lande*, Würzburg, 1894, p. 209.
- (37) J. C. J. Kempees, *De tocht van Overste van Daalen door Gayo, Alas- en Bataklanden*, Amsterdam, n. d., p. 199.
- (38) W. Volz, *Nord-Sumatra*, vol. 1, Berlin, 1909, pp. 323-325.
- (39) *Ibid.*, p. 323.
- (40) Arens, *op. cit.*
- (41) E. W. Said, *Orientalism*, New York, 1978 (板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳『オリエンタリズム』平凡社、一九八六年)、永淵康之『バリ島』講談社、一九九八年。
(本学教授)